



志保之利五篇三

4 曾5
508
59



45
508
59



三月 一りわさしこ

○丙戌正月試筆に万国一時尔新之と云ふ事と

れとけしきありらうし玉垣の内津沙国の

春の油

同ー收母多一人小寿と云ふ

かけまくる夜むみよりにひいてね事なれ世のね事

○喚福 宋ノ歌十二月二十六日以後祭先

節祠 俗節之祭如又日上元上巳端午

○後土御門院應仁前後 將軍義政在職 参河国八細川の領

多一を以て同ハ斯波家に属シ後柏原院文龜永正の頃

將軍義隆
左職 東參牛窪牧野 二連木富西郡鶴殿 作午奥平長

篠菅沼野田日上伊奈本多其他設樂足助春瀨西卿吉田等

地遠刈井伊谷井伊乾天野宇津山濱名等二十餘縣皆今

川家源氏親
之弟也の處分多ク其後或ハ甲列の武田に属ス又ハ

徳川家へ從ひたり

○參列成道山大樹寺ハ右京亮源親忠朝臣ノ創建同山

勢譽上人浴東知恩院支院也今ハ在住僧勅許紫衣



寺産七百石

瑞雲院贈權大納言廣忠卿天文十八年己酉
三月六日薨 一百五

十年遠忌元禄十一年戊寅三月六日於大樹

寺法會自四月
至六月

上使青山下野守 甲府君 戸田助太夫

尾公生駒主計 紀公 津田治兵衛

水戸府君 富田小平治 白銀二十枚

松平備前守 十枚
使畑善兵衛 松平太郎左衛門 金五二
百疋

水野豊前守

二枚

上使

青山下野守

自一万并調
銀二枚

○或問子所筆天野先祖記事因崇南朝者以祖
 宗奉仕之主也然源將軍尊氏以武勇定天下
 其功誰不知之乎子以尊氏書朝敵者誤後尊
 氏已奉持明上皇之院宣以師師是豈賊乎答
 嗚呼吾子見野史片章而未曉亂臣奸謀之意
 又尊氏為張己之逆威殺君之子誣良臣是不
 亂賊而何乎且建武二年十月帝以尊氏各朝

敵十一月廿六日削尊氏之官籍是實朝敵之

爵

證也其請院宣者其心欲挾一主而無朝敵之

名謀計而已後醍醐院是正統之主光嚴光朝

以下者謂之僭偽亦可也可惜乎南朝無人主

之器故神器終遷北然後村上長慶院後龜山

者實正統之君也

○堀久太郎秀政掃部大夫某任為藤山城守
環列人也孫太郎尼

衛門秀重嫡子也信長公及秀吉公仕越後領

後越前加賀内方十八万石封且凡衛門督任

羽柴氏賜天正十八年小田原役陣中卒

因尔举堀氏直政美濃物尾刈奥田村の産奥田

之為其の孫之父、秀田也、亦所と稱し直政堀父

太郎秀政に仕て、其稱号を受られしと云

土井甚之少利勝、水野下野守信元の子りしと土井

少公利昌、狼子と云、後大炊頭に任、尋て侍從位置

りしと云

今ノ土井ノ家實ハ
尾刈の水野氏也

織田家之法師、童名と云、人二人あり、正二位權中納言

秀信岐阜中納言、後三位左中將信忠の嫡子と云、三法師

参議從三位秀雄、前内府信雄の一男と云、三法師

秀雄慶長十五年八月八日逝、二十八歳と云

号、月松院天巖玄高

南来江陰軍乾明院五百阿羅漢尊号見、梳藏四十三帙

小兒疱瘡と云、ぬぐく、某と云、或人のものに秘しと云

一、レインテンガイノシモ
ワセネノククイミラ ●是ホトニ九シ金ハツツ衣ヲ小兒年ノ教用ナ

一符 嵐此字ノ小紙ニ書九銀バツノ夜ニ一粒

東ニ當ル井水ヲ寅ノ刻ニ汲其水ニテ符ヲ吞セ其餘水ヲ吞目

一盃羊入黒大豆七粒金子一符一分ヲ可熱ヲ吞水ニ入一盃ニ煎其湯

シ以テ彼九茶ヲ吞ス凡此茶ニテ大勢一生癩瘡ヲ又

カレシ者多シト云

○正保三年丙戌八月越前国より出り高船韃靼へ漂寄

ヤ、韃子等是と北京に送り又より朝鮮へ遣り我

国へ送りせり其時彼商人等々吏へ啓せり

籍記ありしと永平氏と云れり

新保村

国田云云

山田

宇井与志

長富 後十高 元平

二回

久保

元化

お糸

元吉

始渡村

十元

竹内蔵元使

アノシ

甘濱浦

次郎

新川

後三郎

市三郎

源中郎

右十右人日新八月十九日暴風依て北方へ吹放れ其時

韃地漂着又より都府へ入り七日小住し是より北京ノ府下へ

又二十余日あり四月留止是より朝鮮の国境より廿九日往

○武田信玄法度書牒中に對父母聊不可不孝申と云一
 條何の面目ありて令せし自父と追ひ國と貪貪みり
 人よハ孝とせし教しくり候いと可可しき事なり
 曰晴信於行儀甚所し法度以下ハ有有き法を違申
 之不不禮禮之失徳失徳ハ用申用申す申申す之之言言路路と云て
 自己の罪と云申云申と令せしハ奇奇拍拍ちちされし父と
 追ひし追ひ申申と云人ありしあり也也

○令三ツロトハ苛シクシ則シテ不レ禮レ禁禁多多則シテ不レ行レ
三ツロトハ 呂氏 春秋

○近世毒と毒者大際金と令復して婦也の事ハ不不向
 きて其其女女徳徳の可可否否ハ度外度外に置置申申不不高高也也此此為為す
 起起りて武武者者も欲欲とれれ先先とせし國國禁禁ありしありも
 死死しし後後又又婦婦人人偏偏の本本燈燈礼礼ハ万万世世の始始なりなりそそんんど
 可可くくせせざるざる教教法法の失失ありて互互に離離のこししくくなりなりも
 多多し又又他他處處に男男子子と考考して子子とともも先先金金限限と考考
 一一考考博博と考考ししににははししるる事事はは小小なりなりて名名々々ししたたと考考すす者
 少少くく飲飲食食一一盃盃酒酒失失却却滿滿船船莫莫者者ハ五五尺尺ありありてて何何

〇人唯別賢莫解賦記成童の時おれ者に多た必あ
 〇々々所人極人々人に十四の時おれ人二代歌
 得の意代方て物とむりり移まらむ別と流りもの
 〇りとは信まは所之アしおあ人さす也記申ノ書言
 不華番と名好人小文りぬり自く無任と流
 〇少将光通職のくばのに奇もそ故法皇にまじ
 〇勅判をやらけたまひしと也て故多う申に

早春夜

きのより小春もあつして東海や関のくろふち新夜うみ
 小あ子規
 志のいほはるこさくさくこつもれをのぬりぬふ
 〇月前十夜
 〇新やとる尾取く書と吹かた月もみさく中道の秋凡
 〇初一
 〇あつふあつしたのこして古里やもこつちの初一の言

町由云々

さうりやのせのふとらと祐月をいふこれのやまやみまじ
をむ村名

一すべに桐がりにすむ人のありとてさうりやの山あり
れ多し今も一竹遊その後清池院とや作り
彼次とと後西院沙汰ト花ういて山を清きり
一日のゆめ池の後彼海草うすすらに備
さればまに

後西院上皇

百八のふりいしるり埋りれぬ言のまのこれ
御前よりけり人の妻みまうり後清池の二文字

清池震源と深しれりたまひ影流もあつた
あまらたの右よりしと少後あやかりゆり

かハれをいしかりしうし清池河口とさういあり
予し年月方のあまうんとあつひられとさうい

らしてそ人の善徳のきえと志し合ふのふれ
書写したるゆり改む

照高院

之く人あは清し其まに元一と名は法の真身

○ 信長

相見院

信忠

從三位九中将秋田城父
母生駒藏人 家宗女

信秀

三法師或曰飛竜御曹司正三位權中納言居濃列岐阜城
慶長五年子石田氏而不利出城紀列富野山入日十年七月
二十七日薨二十六歳号大善院松貞主名大居士 和論語
一説慶長十年五月八日於志保彈國高山薨 改阜軍記

秀則

後四位下待從左衛門大尉
法名宗介

信秀卿ハ濃田の嫡嗣なり一或ハ其於歷代の

一人とも物りしと亡へとてしる也山ノ薨せしれ

忌日をたえりハしる也鳴心信長乱世又生れ攻城

此致也即しりし一平半致過の化又抑りされも

乱長逆裁の事ありて又子一可又立いぬを編らる

中納言の君も其も十年の秋霧ふくれ治りれ夢とあり

あいに凡致人運りたり利名にまよひて其をさすあり

まよひしるも無下此神ありたり

○ 家戦國の名象屋形号と將軍家に請て許さる人あり

あり或は記録をえりし當時屋形号を治りれは後其法也

小鳥帽子直書ありは其後其をさすも其神なりしなり

とて古くは神代巻に於て後小徳小徳人そとけりてきたの
是れを以てしるすを以て其の義を貴く一葉は何れ也
あつたやうに作らば我れと今も言て多しと云ふは
字國を以て改まると後氏に云ふ人々授けしを慮海
を以て物に國主己の情を任て祖字此法を傳ふありあ國
の大言くもあ申歷代に於て中葉ハ天下の大事を討取
ふは悔ふ事易に於て事人然るに改まるとあり
申、あはれにたすは今我れ古人の神代巻と云ふ事有り

誤りて記して後の忘化と云ふ

○應神天皇遣荒田別於百海搜聘有識者國主

貴須王恭奉使旨採採宗族遺其孫辰孫王一石

智宗王入朝天皇嘉乎以為皇太子之師於是始

傳書籍大綱儒風文教之興實在於此今學者

知王仁而不知辰孫載詳統日本紀四十延曆

九年七月伊与守津守連真道之上表也

辰孫王 都慕王六世貴須王之孫 大阿良王 仁惠地侍 亥陽君

午定若

味沙

辰尔

敏達之御宇詠
鳥羽之表人也

麻呂

是葛井連船津連津守連菅野朝臣等祖也

○ 龍

古文龍字

龍 古文春字

藤 同藤

虫

同虹見漢
天文志

媿

韓非子曰媿一身而口爭食相訾遂相殺也
古人字說曰古之媿字也

信景梅子二首西口貪害すりよのち地の間楊り

沛虫のいあも同胞兄弟利を貪り互に害心有るありて

媿れ類くまのい

盡

音津

気液也俗用津字非也

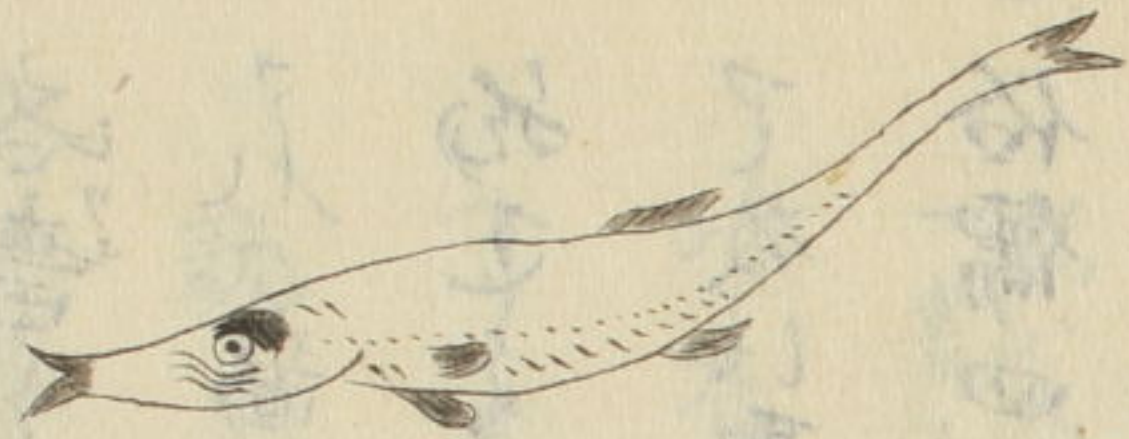
衞

行且賣也又自矜也

言行相會而自媒以利益也

聖

珎俗字



。む月の神ノ賣魚者ハ魚と指ラズ表れり何

むと河ハ灘鱈ノ魚ヲとつふれは

よりちづや〜と魚と指れり又形を異

なり禽獸表魚甲分の表一表〜ありて

方言異あり〜と味も大同〜と傳へん

○各書と橋斎と勢の同く美纂と又勢の同く

これハ高者ハ必奢セキ尤モト小人是とを彼カす所を後ノ慕ス小

物モノも自波ミヅと教ノ事コトありニあリてハ彼カをシてハ彼カをシてハこれ

に及び聖人不恆不求トすルめカ小ノ徳ト人ノ云フ為シ子ノ心ヲ

○俗儒四書ヲ講スル者朱註ノ微意ヲ細密ニ見得ル

故本旨ヲ失フ事毎ニ多シ能章句集註ノ本意

理會シテ本文ヲ講スヘキノミ

設スハ論ノ学而ノ如キ始ニ学ノ思ヒトイフレ

フ言次ニ人性固ヨリ皆善学ヘハ必克齊ノ

如クナルヘシ故ニ先覺ノ為所效ステ知行ヲ

立テキ事云ヘリ明善ハ格致ノ一即コレ知也復初ハ

誠正修ノ一ヲコレ行也然レハカク一書ノ意味アリ混セヌメ又離ヘカラス

次存養ノ字ニ入テ心自ラ喜意ノ極効ヲ云

ヘリ其次程説ニ條及謝説一條是圈外ノ

説ト異ナリ是ハ乃学問ノ實ヲ也三條ニ

テ尽セリ程説并一條ハ格物致知ノ事善

ノ羽カスルヲ云玉へハ即知ノ方也二條ハ
誠正修ノコト初ニ復ルノヲ云玉へハ行ノ
方也サテコソ知行合一ナラテハ学ニ非サ
ルヲヲ説リ謝説ニシテ時處トシテ然
ラサルヲ無キヲ云テ效ノ字ノ味ヲスレ
セリ如レ此見レハ始終貫テ一章ノ旨明ナ
ルヘシ凡ヘテ論語ハ聖人ノ言ナレハ何
レモヒシトイヒツメサルヤウニ講スヘ

ニ孟子ノ講ト不同

凡註中諸氏說一團無キハ自註ト照シ合テ其實
ヲ説ク時註也一團ヲ為テ奉給ヘル説ハ文句シハ解
セスハ其意旨ヲ分明セル語ナリ餘意ヲ奉タルハ必朱
註其趣ヲ折ハリ玉フ俗儒混メ諸氏ノ説ヲ以テ別
意餘意トノミ語ル甚タ朱意ヲ失ヘリ執意ヲワケテ
見ルヘキナリ

○尾刈中嶋郡大湏庄北野村テ屋真福寺野北
能信上人開基空海所作正觀音ノ立像安置其
後南朝後村上院勅願寺ト云レテ皇子東南院ニ
呂法親王任瑜ト云レテ寺勢ト云レテ司ト云レテめト云レテあり
任瑜ト云テ河内宮ノ後人誤
土御門院皇子ト云テ居ル鐘
銘也

實に真福寺第三世より又此寺藏本内牛王經及牛王

儀軌ハ世ホ希ク秘經也經ありて宝生院ト号ス 今寺尾城南ニ移ス然レ四号ニ

ヨリ大頂ト稱ス 任瑜法親王南朝詔運国に關セリ

○今川義元ハ国光寺国氏ノ九世從四位下前修理大夫氏親

三男之從四位下治部太輔ヲ并セシ也一卒後天澤寺殿ト号ス

○足利家ノ末(武家)秀ヨリ者に屋形号と授ラレ一内口訣

と云ルハ屋形の稱ハ大長小任ヤ人の居所也ハ稱セリ

と云クハ戰国ノ驕僂是のいふ也 三内口訣ハ三光院内府の記ナリ

号人書

一池田徳入三原山首 抄名原山首内 其納ハ所謂山首也

刻抄名三代也之記又ハ三原抄末ニ中徳ノ年號書有原山ノ事

一天正十二年四月尾列山牧山陣ノ刻永井傳信尾列ハ山首也

其表也也之抄名抄名記又活字帝如ハ一原之庭ノ陣ハ山首也

尾列名ハ之と云ハ池田徳入三原山首ト云ハ合名也山首也

大正十二年四月尾列山牧山陣ノ刻永井傳信尾列ハ山首也

此表也也之抄名抄名記又活字帝如ハ一原之庭ノ陣ハ山首也

以のふ... 背負す... 河城...
 家康様へお掛角... 旗機...
 井太... 右... 旗...
 御... 旗... 背負...
 素... 旗...
 一... 御... 旗...
 以...

皇列新... 皇...

長井氏推池
 田...
 中村...

是ハ元禄十二年永井氏より...
 朱子門人凡四百餘人詳ニ朱子實記ニ

〇 畷行 書シ字ス時紙ノ間へ入ルけし云フ、畷ノ字也
 行ハ幾行ノ行也 朱子文集ニアリ

〇 一様一條痕一掴一掌血 宋ノ俗語ニツカリトアトノ付クシニマ

〇 尤文字と他々の先々體と...

詩 律下

辭 其辭因了

歌 放情

標 標守常了了院而躬也

曲 声音韻(北(高下)長起多)

吟 吁嗟感嘆

嘆 沉吟深思大息

怨 憤て怒る

引 先後と序し

詠 非(鼓鐘)して從歌(俚俗)通(多)り

詠 嗟嘆して了る

篇 情と字とを以て鋪て

此等君春年々 体意聲三字註解

○松平道弘 證文判形通 松平滿年 日一通 松平持平 日上

松平政平 日上 松平持頼 日上

右在三州大瀨称名寺藏。是松平太郎在系信重之先

歛然ノ嗣系ノ前後不可考之

親忠主 所判形通 信忠主 日四通

是德川家證文也在同寺

松樹院長阿恭雲居士 亨德元年壬申七月十四日逝

是世良田右京亮源有親主法号云安牌子於称名寺

○豊前国田川郡彦山西靈仙寺 其草創曰美曾 後伏見

院皇子助有法親王補座主

非^レ少^レ也^レ今^レ在^レ振^レ列^レ住^レ吉^レの^レ社^レ主^レと^レ此^レの^レ社^レ務^レと^レい^レふ^レと^レ之^レ

は^レ非^レ^レ凡^レて^レ神^レ祓^レの^レ移^レり^レ也^レ

○和^レ川^レ當^レ麻^レ寺^レ淨^レ土^レ曼^レ荼^レ羅^レ聖^レ禪^レ善^レ峯^レ寺^レ證^レ空^レ作^レ註

記^レ十^レ卷^レ 廢^レ帝^レ天^レ平^レ宝^レ字^レ七^レ年^レ六^レ月^レ也^レ現^レト^レ

○順^レ德^レ院^レ達^レ保^レ年^レ中^レ勅^レ撰^レ字^レ之^レ良^レ賀^レ源^レ慶^レ源^レ尊^レ等^レ所

圖^レ銘^レ文^レ 修^レ理^レ大^レ夫^レ藤^レ原^レ行^レ能^レ朝^レ臣^レ筆^レト^レ

後^レ堀^レ河^レ院^レ貞^レ應^レ二^レ年^レ勅^レ重^レ繪^レト^レ

右^レ緣^レ自^レ下^レ至^レ上^レ凡^レ十二^レ局^レ

禁^レ父^レ四^レ童^レ禁^レ母^レ二^レ童^レ臥^レ若^レ二^レ童^レ飲^レ淨^レ一^レ童^レ頭^レ行^レ一^レ童^レ二^レ童^レ觀^レ一^レ童^レ化^レ前^レ一^レ童^レ
三^レ觀^レ每^レ量^レ寺^レ經^レ一^レ部^レ始^レ終^レ之^レ圖^レ

九^レ緣^レ自^レ上^レ至^レ下^レ凡^レ十三^レ局^レ

日^レ想^レ水^レ想^レ地^レ樹^レ池^レ構^レ花^レ庄^レ形^レ像^レ真^レ身^レ觀^レ音^レ勢^レ至^レ普^レ往^レ生^レ雜^レ想^レ
是^レ觀^レ每^レ量^レ寺^レ經^レ十三^レ觀^レ法^レ之^レ圖^レ也

下^レ緣^レ自^レ九^レ迂^レ右^レ凡^レ九^レ局^レ 愛^レ相^レ記^レ也

上^レ品^レ上^レ生^レ上^レ品^レ中^レ生^レ上^レ品^レ下^レ生^レ中^レ品^レ上^レ生^レ中^レ品^レ中^レ生^レ中^レ品^レ下^レ生^レ下^レ品^レ上^レ生^レ下^レ品^レ中^レ生^レ下^レ品^レ下^レ生^レ
是^レ觀^レ每^レ量^レ寺^レ經^レ九^レ終^レ行^レ之^レ圖^レ也

内^レ八^レ重^レ極^レ樂^レ世^レ界^レ相^レ 此^レ八^レ段^レ自^レ日^レ觀^レ至^レ後^レ觀^レ

最^レ下^レ右^レ童^レ祭^レ遣^レ頭^レ智^レ惠^レ

次^レ中^レ臺^レ新^レ生^レ觀^レ喜^レ相^レ表^レ智^レ悲^レ

次九臺來迎顯慈悲

此一重日觀

右臺之上臺思惟觀佛三昧顯智

次中蓮華化生九品往生目

但上品上生在中中央其臺政隆之

次左臺正受念佛三昧顯悲

此一重水觀

中央上上品智慧果滿之表慶相統休也

此一重地觀

慶相者清淨佛土之相土者謂其安住地也故因地觀於中央以之為一鋪本主夫淨土者佛願成就之究竟眾生往生之極致也今因彼土故以空地為第一

蓮華三昧經曰飯食本覺心法身常住妙法心蓮臺本末具足三身德三十七尊住心城普門摩教諸三昧遠離因果法然具每也德悔本圓滿還我頂礼ス心諸佛以此文當深致意而已

上石閣左閣又顯智慧

此樹觀相

次上右殿左殿又顯智慧

此池觀相

次上中右在六殿又足智慧自內至外

此樓觀相

中央元上三堂顯定散中三重理智悲之表
此華座觀相

最上三塔定散念佛三重理智悲元竟相也

此形像觀相

變相之要將彼下人位心於形像之上而觀察理智悲因滿覺體也
今至_三所_八觀_二所_三者蓋變相之本旨觀念之標的唯在_三此_一然_レ
今形像所現者來_レ於地觀光中_一是_レ弥陀真身分記_レ於_レ量法
界_レ之相譬_レ如一月落_レ方川_一象_レ皆_レ同_レ上_レ

右於_三浮屠_一之書中_一見_レ之_レ仍_レ抄_レ備_レ博_レ也我非_レ好_レ異_レ也

○善峯寺證空淨土西山流の祖_レ物_レ其_レ所_レ行_レ天台

字_レ中_レ每_レ日_レ一_レ卷_レの供_レ喪_レ法_レ乃_レ以_レ法_レ華_レ梵_レ綱_レ等_レ彌_レ也_レ曾_レて

四_レ夜_レの義_レ軌_レと慈_レ鎮_レ和_レ尚_レに受_レ職_レ灌_レ頂_レと公_レ回_レ信_レ示_レ遂_レり

彼_レ傳_レ記_レ小_レ志_レせり_レ今_レ此_レ淨_レ土_レ字_レの_レあ_レと_レき_レに_レあ_レり_レ也

○本列_レ松_レ降_レ庄_レ一_レ宮_レの_レ祓_レ主_レ正_レ六_レ位_レ上_レ式_レ部_レ少_レ捕_レ平_レ清_レ田_レ銅_レ鐘

此_レ銘_レを_レ請_レり_レ固_レ辭_レも_レに_レゆ_レり_レや_レり_レも_レに_レや_レ後_レ又_レり_レ也

も_レに_レみ_レり_レの_レや_レと_レ清_レく_レ彫_レり_レ傳_レり_レ也

○尾_レ列_レ一_レ宮_レ正_レ一_レ位_レ真_レ清_レ田_レ大_レ社_レ之_レ懸_レ鎌_レ者_レ蓋_レ也

文明辛丑所鑄而既經二百餘稔坎顛殆為
怙懣於此實承乙酉之秋卿豪鳴金鎔鑄新
鐘架諸樓上再頌生一紀三之德矣謹勤年

本時干銑間係季以銘

銘曰

神苦清越 欽康莊

蛟飛雲閣 雉應山梁

夕杵敲月 曉調含霜

虞茶維樞 德音無疆

古鐘小銘文 天野信景謹撰

尾列中嶋郡

一宮真清田社洪鐘

文明十三年辛丑五月二十七日

大工 藤原 信吉 宗次

讀日本後記抄

天長十年六月壬午詔奉授坐尾張國從三位

契田大神正三位并納封十五戸

是契田神戶の神元今神戶村と稱す地蓋當持封

戸の地あり

七月天下諸国人民姓名及郡卿小川等号有

綱譯者皆令改易

天長以前の国郡山川等の号後と不同祭于此致改易の字
今ハ刑律の号とあり

養和元年正月山城国葛野郡上林卿地方一

町賜_二俵宿_一称_二等_一為_二下祭_一氏神_一也

古ハ我氏祖の神と云々 勅と奉く祠と建ふとい後世漫
私享と為ハ實ハ非礼の言一きん呪ヤ家氏祖の神と云ハ一
氏神と稱し者今世の得也

右牙三卷

二年正月戊辰念_二鑄_一新_二錢_一詔曰懋_二迂_一之軌操_二自

昌_二言_一交_二貿_一而退_二取_一諸_二嗟_一噓_二則_一知_二龜_一文_二人_一弊_二真_一於

曠_二時_一蝸_二影_一栖_二絳_一彰_二於_一日_二術_一姬_二王_一園_二法_一有_二無_一以_二立

化_二居_一漢_二室_一泉_二力_一叙_二散_一由_二其_一不_二遺_一斯_二固_一邦_二家_一取_二要_一

配_二地_一馬_二而_一无_二疆_一公_二私_一攸_二宜_一擬_二天_一竟_二而_一自_二遠_一然_二而

權_二枉_一作_二重_一以_二世_一或_二梭_一子_二去_一母_二隨_一適_二時_一因_二務_一况_二年

祀_二浸_一久_二資_一幣_二已_一賤_二不_一有_二平_一量_二何_一救_二流_一弊_二是_一以_二今

制新錢以叶適奕文曰兼和昌宝以新錢之
當旧錢之十新與旧宜令并用

右四卷

四年六月己巳八多真人請雄詔姓氏錄所載

始祖錯謬非實私門之大患也詔令刊改之

姓氏錄弘仁の勅撰と云々猶錯謬ありと云々の語ありて其の誤りも亦
後世系譜の記其同異ありと宣也

右六卷

吳桃

ウツと訓せりウツハツの音便歟胡桃の胡ハマセの字訓ありハカハ
ウツの字モ亦識者の念州と侍の

五年九月河參遠駿夏甲武鑑濃飛信越買播

紀十六国言有物如灰後天而雨幾内豊稔

五穀價賤老農名此物米華云リ

後世石ノ灰如クト云ハス秋米華の作知人ナリ

右七卷

六年正月勅令卿邑每季敬禮疫神

疫神ハ是ハ今ハ所謂疫神也此將未午頭天王ノ修治年

七月令幾内国司勸種喬木以其所生土地不_レ論

沃瘠ノ播種收穫共在秋中一稻梁之外足為一食也

此米より蕎麥ソキテ善ク檢テリト云々後世も乃て乃ち不
利あり飲食の人又それと好むト云々

圍碁ノ惣而立局 輸四籌
贏一籌

今俗一番二番といふ石幾子ヲハ多クトハ少ク

出羽國言去八月廿九日管田川郡司解俚郡

西濱達府之程五十餘里本自無石而後三月三

日霖雨無止雷電關聲鍾十餘具乃見晴天時

向海畔自然墮石其數不少或似鏃或似鋒或

白或黑或青赤凡厥壯体銳皆白而莖則白東

所進上ス兵家之右數十枚收之外記局ニ

梅今猶奥羽の海濱雷後物と云々小俗に祈軍の鏃と
稱せり又之を後と云々色は青赤ありて固く事今其
之府の畝一に五

右八卷

所白將往

太上皇の諱ト云々

右九卷

陸奥國柴田郡權大領外從六位下勳七等河

右十四卷

十二年正月外從五位下尾張連演年於竟尾
道上舞和風長壽樂演主本是伶人也時年
一百十三自作此舞

抄本不尾列舞田の社家傳記云曰演之舞田の社傳
人云一と云今冷人十餘部のこと云凡舞田の祠官云
一と也舞の者甚多

右十五卷

十五年九月己亥命鑄新錢文曰是年大室

先の玉史也凡の時世高はゆつときよの一二を足してハ紙也
其の年一書林と九卷より一書一書春句のついでに是を
又してしてして是をいふれそ中はその時のゆへ人の
関いよきつとをいひて言はれしは後の人をも足す
又其時のついでに言ふもや中比足しすられ文徳天皇御
抄一書とす

海も足しと云ハ昔とあることハ印子等の記はりして

。文德實錄抜抄

上啓曰臣等之具陳以勸進之誠一巻

勸進の事々ハ信は昨多福を言ふ名のこころあり

嘉祥三年九月庚子朝神祇權少祐正六位上

占部業基向尾張大神社以買瑞之由三卷

大神神社中嶋郡勢田庄今ノ三明神と号一少祠也
正体一言は細む可憐哉

参河国知之ササキ狭投野舘ニ

今池羅部と書ハツル之類と格ノ字に化して野舎と云
又野舘と所災と書ハ俗也

諸衛府献ウツ卯杖ウツ逐精魁ウツ也四卷

四月卯杖のし何の處とも云ふ卯杖ハ二月と云ふ
しとも逐精の字とも云ふ卯杖ハ卯杖と云ふ

仁壽二年十二月癸未参議元大辨從三位小

野朝臣篁王覽日レ上

彼傳又天長九年哀父終哀毀過礼之既流の時在路
論行吟七十韻と賦と又曰家素清貧事母至孝等及
より實儒雅の君子多と佛者妖妄の説を化して實買東
日入り十五と云々等の証と云々實源に於て實佛位と云
位也一書一書も載せず忘小浮屠氏は賢を証す

飽瘡サウ 五卷

天平九年弘仁元年と云仁壽三年流刑云々と云ふれ
其年神祇大副中臣逸志と皇大神命云々一書
陰云々と流刑云々一書
女は被せられと云々

窮蹙 七卷

是民の飢困と云今俗致治を以て窮蹙と云

齊衡二年閏四月丁酉分美濃國多藝武義兩

郡為多藝石津武義郡上凡四郡同日

五月丁卯加筑後國高良王無名神位田四町同日

按高良神社の位階其社の位田多しと云ふ事あり

十二月大炊寮大八宮電神命火武主比命庚

大皇神並授三從五位下同日

此神号延喜式小足子れ也

大僧都傳燈大法師位實敏姓物部氏尾張國

愛智郡人也八卷

今愛智郡古井庄物部神社あり俗に石神堂と稱す一巨石あり之を我敏公有司り余りて祠と建たり按ずるに實敏法師ハ此處の産者ありけり

同三年九月辛亥造酒司酒甕神從五位下大

色力自小色力自等並預三春秋同日

此神号し之世人善く知るれ也

無不剛此奈九卷ノ詔旨ナリ

按此の倭裔の初より多むたつもの多しと云ふは其のよしありしに依りて但し室令と欲詠と後中甲の事あり

稲荷神之前 曰正

稲荷のしるしに神ありて明けし

天安元年十月己卯在常陸国大洗磯前酒列

磯前而神名藥師菩薩名神 曰正

此神名多ふ始て又曰板本と名菩薩の移りくの神は又移り
以呼胡に泥也と云

同月丙戌故大僧都空海大僧正乃宮贈賜

治賜不之 曰正

是真濟の僧と賜い一時号と昔師に譲と請て改り
宣命と賜り之今真濟の流絶てり宣り才ふ種の後

在り

肥後国菊池城院 十卷

抄すに鎮西大宰府の外菊池に公官ありて西鎮と名
凡王政の盛ると云ふ

有白雲自^良豆^下埋^下特人謂之^下旗雲

今世正一條のそまを写りてとくは神と云ふ
又ハ橋と海と云ふと云ふは昔云ふと云ふ也

大宰助山田連春城力傳之仁壽二年正月途為

駿河分^下之特部下駿河郡有^下自伊豆新移神名

阿氣大神国司中官建新社以祭祀而祓^下且祝

等増以奇異之事註誤國司庶人春城到任記

其訛偽自以後妖吉永絶同上

春城より字は名あり其清聰に事修し及ぶ仁壽二年
印ノ四日の對策に天本寸王非無璽箭況於大才百人
打泥の寺の初ありを器寛大あり可知御月布不物俗忌
と記を交りて陰祀と詭り氏の惑を解り後世良は吏と者
春城の為と云ふと云ふは支原幾乎
丙戌春分夜窓下には祀と

○勸覺院 藤氏ノ學校也

贈大政大臣冬嗣之れ一平流紀曰大才此大長をとり

慮りかりせりふと云ふ藤氏族ノ子曰と勤むたが勸學院

と建する大學寮は東西の曹司あり菅江の二部是と

司する人を教ふ所なり彼大學の南は此院と云ふ是なり

南曹と云ふ中々氏の長者なり人むと此院を管領と云ふ

○攝家

三内口訣曰二光院内府新遣北高
具書也攝政家と云ふは元來近九

二流といひ近衛ヨリ出タル鷹司ト稱し九條ヨリ別タル二條一條

申候是ヲ攝家五流ト云ふ根家ハ子細有テ五流ヲ
為限流カ量アリ是也近衛ハ五流ノ

面雖為宗領名記無定九條雖為庶流峯岡白月輪禪

周後系於楊政之所記号と二代正記ト号ノ為天下之鏡
 然則九條ハ正嫡ト見テハ哉雖然諸家ノ用ハ五流無差別ハ
 但二條之一流ハ南朝所出奔之後後光嚴院被同聖運
 當代之所一流被用正統之事者二條後善光院振政良基公一家之
 勲功也依之至今一稱天下ノ所仰也

謹ヲ極ク皇朝ノ正統ヲ謂ハ後醍醐後村上長慶院後龜山後小松也是レ
 神聖所授受ノ故也後光嚴後同融ハ光嚴光明宗光三帝ト同ク知至
 不渡武家押テ位ニ即ケ奉ルハ同流ト謂ヒ之可也二條良基武家ト謂
 宗光院ノ流ヲサレキ後光嚴院ヲ立ツ是ナリ武家ノ親ト謂
 家小異ナリ故ニ二條家元版ノ時必將軍家ノ諱ノ字ヲ授ケラレ
 今ニ至リ然リ

二條
 滿基 義滿取 持基 義持取 持通 日上 政嗣 義政取

尚基 義尚取 尹房 義尹取 晴良 義晴取 昭實 義昭取

康道 神君取 光平 大融公取 潤平 當代

○ 隋煬帝為晉王之時受戒天台智者大師法諱号
 惣持

天台の傳りて又煬帝ハ禁封小海より大西まで
 法王の時父王の妃と犯して父を弑して位とねとて万民
 と苦く酒色も濫用して斗争も非難をのりて入りて

戒何の益々ある時浮屠の國家を益々く却て大害あり
 是亦もつて信りあふくし清和天皇在位の間慈覺が受戒
 ありは諱を素真と稱せりハ煬帝例と名ふ可ぬたれぬを
 佛者ハ何のも別なく帝に受戒ありし例ありて可るは
 師と申すは門多ふくは源親房が在位ハ帝法皇とす可る事
 是亦もつてぬを可と稱せりハ是の儀は又もハ代ハ御受
 戒の事多し佛者ハ凶惡不義の人ハ是乃ハ因と佛法を
 信すもハ種多し人々との之を厭ハ君と執りて賦子

され大佛者興隆の祖と作す聖代國主孝謙の姫乳花山の恩
 弱如類いしありハ大佛建立ありて今所承祀の姫を崇め信善
 薩の化現多し人々につまみありあり

中宮郡尾張本國靈神社國府正月儺追ハ元浮屠備平法之芽にして小人
 形と多ク化して儺と擊其人形と小人形と稱す別小大形ありし儺子負す可る其芽ありて國
 衙野カノリノ中比より民家と也

國衙屋敷とす所ハ昔國司の公官の福斯波氏の時清原が移りて其處ハ野
 とありてをそ良の家と化し今其跡とすハ民の住宅とあり
 故ハ高野堂村ハ劔の社の境内ありて芽を取つて作す此邊古法

たふぬ恨の遠まほい入しつゝ山つて代の恨さうさけ
後世やめく雄渾しつゝ夢色の家たあきてと都の侍もや

五月七日 福一建業語王家

今ふ挨拶むり建業と書しと

十月十五日 今夜河日待例年也

日待の名上をうり中葉の末密家道にた今一讀小日月表
冬より一節 天子の目を祀るもふ事非れまあふこれ河
原氏の忘滅不惑い正れの神事と慶し日待の俗とあふ
是秋揚子園基名等のしつゝふれ沙趣のふりて日明の河
すゝ勢ふはそまて神を讀し多ふとつてすゝと一
流の山後ハのき沙林事のう佛事のもあふりつて
意にふりつてお給定あふりつてのふりつてはは
久末代の山地あふりつてハ民家市井のつてふあふり

中とありとや

廿一日 御楯子御登地恒

今朝家沙藏重と移り武家に玄指しつゝハり人の
文子とあやまねれとあ業上方の人のい

右見られお抱いて其一二と記し是忘る備へられ

呼吸文龜前後天下凶乱の際大旱洪水飢饉疫癘

折つて彗星天を現し暴清地をのり

永正三年七月彗星日七年八月廿七日遠列瀨名海邊清に
破して胡水とあり今荒井の今切とあり

これのくも 大神宮を鏡し 永正九月 春日の神来

教子権柄 是等ハ下ノ御事

永正二年 七月

朝家の所々見ゆる延長不学して上奏の

てし將軍命令と草フタタ 義隆逃奔 菅領害小遭て 細川 政元

執とらる京中朝々を敷放火盜賊の甚あとも致

久しき習ひてなとせしやとあけきりめす

色とあり十種香揚弓の所弄いられ音楽格子の

想いとあしやとせし路ありし 人君の所為した

せりしと後ハ將軍も武威あましくあひて

系勅の流大為となり 露園は包りあひし 室町

目元人そに及く竹水徳と脩めをとりて下

とあり人ありし 大内上杉北条今川武田里見

佐竹長尾善名 伊達朝倉 畠山土波 斎藤北高

佐々木三好 松永 宇喜田毛利 尾子 陶 龍造寺 大友

富津等 武雄蜂起し 徳川もその政をり 徳川

の人あり 織田信長のみや 在年の暮いそりありあり

ありそ後小裁せしとありし 豊臣家尋て 凡下あり

出て六十余列を席巻して一統の政とあり名は其間

通ずる申す秘を未考者の礼せり

○ ありては海と平本の禱紙に冠紙の者とあり

かいつくはるる答これ魁精陽中といふ星のよき高書

集字に及了り北斗代魁星ハ文章を司りて平と紋銀と

と執つた故書林魁本の象々といふ字者より為事に非ず

化て星篇小形を他より道家佛者の意より上吉れ申す

あしき

